

MUSASHINO^{Vol. 92} *for* TOMORROW



巻頭

豊饒の海の新聞記者

雑喉 潤

日本・ドナウ交流年2009記念事業——

『武蔵野音楽大学管弦楽団ハンガリー演奏旅行』報告

音楽を通しての国際交流

卒業生インタビュー

信じられないほどの幸運

浦田有美

January 2010
vol.92

明けましておめでとうございます

学校法人 武蔵野音楽学園 理事長 福井 直敬

皆様にはご健勝にて、佳き新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

学校法人武蔵野音楽学園は、昨年創立80周年を迎え、一連の記念行事を滞りなく終了しました。昭和4(1929)年、武蔵野音楽学校として誕生した本学園は、昭和から平成へと激しい時代の変化を乗り越え、今日の姿にまで発展することができました。これも偏に、各官公庁をはじめ国内外の皆様温かいご支援、ご厚情、また歴代学園関係者のご努力、ご協力の賜であり、深く感謝申し上げます。

顧みますと、この間、我が国が輝かしい発展を遂げた高度成長の時代には、その追い風を受けて本学園も大きく発展しましたが、創立時、戦争の時代、終戦直後など、校史の大部分は苦勞と困難の連続でありました。しか

し、学園関係者の熱い信念と努力によりその困難を乗り越え、昭和24(1949)年、新しい学校制度により武蔵野音楽大学への移行を果たし、併せて附属学校、附属施設等を充実し、学園発展の基礎を築きました。

近年にいたり、武蔵野音楽大学は大学院博士後期課程、さらに実技教育に重点を置く「ヴィルトゥオーソ学科」、芸術活動のプロデュース能力、マネジメント能力を磨く「音楽環境運営学科」を新たに設置し、ここに音楽学部7学科、大学院修士・博士両課程を持つ、西洋音楽の総合大学としての教学組織を確立することができました。本学園では、常に音楽芸術の質の向上を求めるとともに、音楽教育の社会的基盤強化に寄与することを、一貫した教育理念としております。今後は、この理

創立80周年記念式典 ▲
(12月4日 武蔵野音楽学園 ベートーヴェンホール)

念に従い、教育研究内容の一層の高度化と、施設設備の近代化を進めていくことが、学園に課せられた責務であると考えます。

我が国は今、大きな転換点を迎えていると申せます。その中で、本学園も再び厳しい環境に向かい歩を進めなければなりません。しかし、役員、教職員一同、これまで歩んだ80年の校史を、次なる発展への貴重な糧とし教訓として、ひき続きこの学園の建学の精神、教育理念の具現に鋭意邁進する決意であります。

皆様の変わらぬご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。



▲ 創立80周年記念演奏会。ハイドン オラトリオ《天地創造》(12月7日 サントリーホール)

豊饒の海の新聞記者

雑喉 潤 ● 朝日新聞社友 ●

朝日新聞編集委員として音楽・オペラを担当し、現在は尚美学園大学大学院の客員教授をなさっている雑喉先生。音楽に造詣の深い先生が京都大学で中国文学を専攻されたきっかけも、中国の言葉の美しい音の世界に魅了されてのことだったといいます。中国文学との浅からぬ因縁に彩られた、先生の長年にわたる激動のジャーナリスト人生を振り返っていただきました。

1950年晩秋のことと記憶する。京大文学部の、古くさいが一番大きな教室で、中国文学の吉川幸次郎教授の中国文学史の講義を待っていた。

わたくしは2回生（京大では何年生といわずに何回生という）で、そろそろ3回生からの専門分野を決めなければならなかった。当時の流行はフランス文学で、ベレエ帽を斜めにかぶり、ページを切らない原書を小脇にかかえる姿が、学内の随所に見られた。そのころロマン・ロランの「ジャン・クリス

トフ」を3巻あたりまで原書で読破していたので、フランス文学に色気がなくなはなかった。しかしこの日は、専門課程の講義とはどんなものかを体験するつもりで、著名な吉川教授を選んだのである。



韻律の美しさに
魅せられて



「きょうは王維の詩を読むことにします。題は〈終南の別業〉、王維が終南山に建てた別荘のことです」

説明はもう少しつづく。

「王維のあざな、つまり通常の呼び名は摩詰、王維の維につづけるとくゆいまきつ、釈迦のころのすぐれた信者の名です。だからこの詩の第1句、〈中歳頗る道を好み〉の〈道〉は、中国でふつう意識される儒教や道教ではなく、仏教でなくてはならない。では詩をぶっつけに詠みます」

現代中国音での、なんとという美しい発音だったろう。平仄、脚韻は、ともに音読の耳に響く快い調和のためにあるのだ！ 中学で習った、返り点、送りがなつきのギクシャク読みの漢詩とまったく違った妙音の世界がそこにあるではないか。わたくしは美しい音の世界に酔って、あとの解釈はうわの空で、ただ茫然としていた。わたくしは躊躇することなく、翌日に中国文学専攻の届けを出した。

3回生の後半には卒業論文のテーマを決めなければならない。わたくしは



雑喉 潤 Jun Zako

1929年神戸生まれ。'53年3月京都大学文学部卒業、専攻は中国語学中国文学。同11月朝日新聞に入社、名古屋、西部各学芸部長を経て、東京本社編集委員として音楽・オペラを担当。'89年退職後、浜離宮朝日ホール準備室長、次いで総合プロデューサー、'93年退職。'97年名古屋自由学院、次いで名古屋芸術大学短期大学部教授、'02年退職。'05年から尚美学園大学大学院客員教授。

〔主な著書〕『三國志の大地』（竹内書店新社）、『三國志と日本人』『「史記」の人間学』（どちらも講談社現代新書）、『文天祥の生涯』（尚文社ジャパン）、『浅草6区はいつもモダンだった』（朝日新聞社）



▲ 武蔵野音楽大学江古田キャンパス

少年時代から親しんでいた三國志から題材を取ることにした。それも陳寿の正史『三國志』を読み、曹操の人間像に迫るという構想を立てた。

「これはずいぶんとアンビシャスなテーマやな」

と吉川先生はいわれた。そして君の実力では原書を読みこなせないだろうからと、桑原武夫教授の家に伝わる江戸時代の和刻本を借りる世話をしてくださった。

こう書くと順風満帆のように聞こえる。しかし被災者で失職者を父に持つ、母と、わたくしを頭に4人兄弟妹の一家に、貧乏は容赦なく襲いかかってきた。焼け跡の借家住まいは、家主が疎開先から帰ってきて追い出され、なんとか二日間だけの町営住宅に転



▲ レッスン風景 (ツォルト・ティバイ教授)

がり込めたものの、収入のない父親は払い下げの毛布をどてらに直したのを着込み、一日中たばこ盆の前で刻みを吸ってなにもしない。しないよりできなかったのだろう。当時「週刊朝日」に挿絵入りで載った、山上憶良の「貧窮問答歌」にあまりにもそっくりなのに驚いたことがあった。

「えらそうにいうなら、自分でかせいで大学に行け」

と怒鳴られたわたくしは、幸い奨学資金を貸与されたのと、当時の京大新聞(そのころ学園新聞といていた)記者に採用され、その手当とで、かつがつながら大学生活をつづけていた。当時こういう学生は少なく

「われわれは学ばんがためではなく、食わんがために大学に来ているんだ」

と自嘲しあったものである。事実、卒業論文執筆のころになっても新聞の仕事が忙しかったため、三國志の論文はすこぶる不出来で優良可のまなかである「良」を頂戴してしまった。大学院の試験にはパスしたが、大学院生に貸与される特別奨学金は不許可になった。「良」が禍いしたのである。それで学籍はそのままに、ある先輩の



▲ 江古田キャンパス

紹介で、大阪朝日会館の雑誌編集部、週5回午後から勤めることになった。手当は少なかったが、仕事の合間にステージのオペラや演劇、それに映画を毎日のように楽しむことができ、これが後で考えると、計り知れない心の糧となっていた。

ついに 学問を棄てた！

それから半年後、母から手紙が来た。父が腑抜けのようになって、食べてゆくすべがない、という。わたくしは覚悟を決めて大学院を辞めるべく吉川教授に話しに行った。

先生は厳しい表情だったが、事情を聴かれて「やむを得ない」と判断さ

ニュー・ストリーム・ コンサートXI

ヴィルトゥオーソ学科演奏会3
平成21年11月11日 トッパンホール



▲ 濱 初帆 (マリンバ)



▲ 野上 剛 (ピアノ)



▲ 波佐間成美 (ソプラノ)



▲ 荒井茉里奈 (ピアノ)



▲ 前田菜々子 (ピアノ)

れたのだろう。これからどうするのか、と聞かれた。わたくしは学園新聞を4回生のとき辞めたが、教師の免状を取得するのに必要な教職課程をとっていない。文学部出身者としては、新聞社を受けるより仕方がない。思い切って朝日新聞を受けますと答えた。

「受ける以上は合格してください」

とこれも厳しくいわれた。競争率200倍だというのに。

1953年11月、わたくしは朝日新聞記者となった。入社試験の語学に中国語を選んだのが幸いした。英独仏語の受験者は惨憺たる成績だったという。それでも200倍の中の採用では一番ビリの3番目の補欠だったので、翌年4月の入社式には参列できず、すでに卒業していたから、11月から即時出

勤、校閲部へ回された。以後、舞鶴、大津、神戸と地方支局を遍歴した。

舞鶴では中国帰国者の取材を20数回やった。帰国船の船底に近い船室に降りて行くと、中国の生活の匂いがした。おれは中国文学を志したのに、なんという運命の変わりようだと感慨を新たにした。

吸い寄せられた『三國志集解』

神戸在勤のとき、東京の調査研究室で行われたインドシナ(今のヴェトナム)の共同研究に参加した。在学時代の中国語、フランス語学習の実績が買われたのだろう。スタッフで参考文献を探しに、神保町の古書街に行くと、「大安」という店の最上段にあった『三國志集解』という3巻の漢籍に目が釘付けになった。わたくしの挫折の記念物ではないか。買おう! と思い立ち、店と心やすい先輩の口利きで、3回払いにもらって購入した。これに読みふけて共同研究をおろそかにしないようにと条件づきだった。

神戸に帰った後、編集専門の整理



▲ レッスン風景(松本美和子特任教授)

部に転じ、デスク(次長)も勤め、8年後に東京学芸部のデスクに転じるころまで、この句読点すらない『三國志集解』に取り組み、「不遇の史書三國志」という論文を書き、京大の小川・入矢両教授の退休記念論文集に載せてもらった。執筆者はすべてどこそこの教授、助教授で、わたくしだけが「朝日新聞社員」だった。

中国文学は五体に生きていた

そのころ中国では文化大革命が進行中で、それとともにいろんな遺跡の発掘が話題になった。ある新聞が1面トップに「孫子は二人いた!」という記事を載せた。編集局長が激昂して学



▲ 入間キャンパス練習室

・音・楽・余・話・ペダルは風景を照らす月の光である

ピアニストが鍵盤を打つと、楽器内部でハンマーが弦を打ち、弦の振動で音が生じる。指を鍵盤から離せばダンパー(消音器)がその振動を止め、音は途絶える。が、この時ダンパー・ペダル(右のペダル)が踏まれていれば、鍵盤から指が離れてもダンパーが弦に戻らず、したがって音は持続する。さらに振動は他の弦にも伝わって楽器全体が豊かに響く。ここまでは多少なりともピアノを弾く人にとって周知の事実であろう。しかしながらその踏み方、とりわけペダルを踏む「深さ」については、十分に意識されていないことが多い。

ダンパーの表面の布(フェルト)には

弾力がある。よって、そのフェルトが弦に完全に密着しているか、完全に離れているか、あるいはその中間(フェルトがわずかに弦に触れている状態)であるかによって、弦の振動は変化する。このダンパーのフェルトが弦を離れ始めてから、すっかり離れてしまうまでの、ごくわずかな中間的ゾーンをいかに活用するか、それはピアノの響きを魔法のように変化させるための重要なテクニックである。

かつて、リヒテルのペダリングに興味を持ったボギーノという調律師が、ピアニストの足もとに光を当て、その影をスクリーンに映し出すことによ

て、ペダリングを記録する装置を考案した。彼はこの装置で、リヒテルが通常、浅く踏んだペダルをいかに微妙にコントロールしているか、逆にペダルを一番下まで深々と踏むことの、いかに少ないかを発見したのである。

「ペダルは風景を照らす月の光である」ブゾニは言った。三日月、満月、さやけき月明かり、雲間から降り注ぐ淡い月明かり、などなど……。すべてはピアニストの足先、すなわちペダルにかかっている。

(訳: 重松万里子)
コンスタンティン・ガネフ
(本学客員教授)

芸部のスタッフを呼びつけたので、わたくしはいった。

「孫子が二人いるのは2000年前から周知の事実です。ただ呉の孫子と並び称される齊の孫臏^{そんぴん}の事跡が今回はじめて明らかになったことがニュースでしょう」

それを書けといわれて、社会面トップに載ると、朝日は抜かれた後の手際が鮮やかだと、外部から妙なほめられ方をされた。『老子道德経』がさかさまになって発掘された、という特派員電がきた。これも老子という書物は「道は」で始める上巻と「徳は」で始まる下巻でできており、たまたま逆に綴じてあったに過ぎない、内容がいま伝わっ



▲ 授業風景（飯島英嗣教授）

ているものと大差ない点を評価すべきだと「注」に書いた。わたくしの学芸部デスクとしての担当は音楽・文化なのに、中国の発掘物の解説に忙殺されていた。

このときふと気がついた。新聞記者稼業のために、一度はふるい棄てたと思った中国文学が、体のどこかに活着しているではないか！ 勇を鼓して卒業間近に読んだ李広田の『引力』という小説に載っていた唐末の詩人韋荘の作品に強く惹かれたのを思い出し、文献をあさって代表作「秦婦吟」のことを書き、自費出版した。

これが1976年10月のことである。翌月からわたくしは名古屋本社学芸部長に赴任する。1年後西部本社に転じた後、1980年春、東京に戻り、音楽・オペラ専門の編集委員となり、この年朝日新聞が招聘者の一員となったウィーン国立オペラを取材にウィーンに渡り、帰ると「青きドナウから次は黄色い水だ」とばかり1ヶ月の「黄河行」に派遣された。新聞社の人使いはまことに乱暴だが、考えると旧制中学でプラスバン

ドの一員として、みなで音楽をつくる楽しさは満喫していたし、それなりの読譜力もある。ウィーンの楽しさは、あらためてそれを回想させてくれた。



ウィーンとともに 回帰した王維



その後、あるオーケストラのマーラー作曲・交響曲「大地の歌」の演奏プログラムのために「『大地の歌』の歌詞について」という原稿を書いた。「大地の歌」の歌詞はすべて唐詩のドイツ語訳で、その原詩の解説を以前に吉川先生が書かれたことがある。そのことに触れて、補強したものだが、最終楽章の「別れ」は王維の「送別」である。この世で意を得ず、ひっこんでしまおうという友への、突き放したようで感慨のこもった詩である。かつて中国文学への針路の決め手になった王維がここに回帰してきた！ 顧みると王維から王維への50余年、わたくしは大海を航海する新聞記者として過ごしてきたのだ。なんという豊饒の海！

音楽の万華鏡 ⑩

月百姿の音楽場面

最後の浮世絵師といわれた月岡芳年（1839－1892）の晩年の傑作のひとつに、日本の歴史上の人物や物語の人物を月とともに描いた『月百姿』という連作がある。その中には音楽場面を描いた作品もいくつか含まれる。ここに挙げた有子内侍（ありこのないし）もそのひとつで、『平家物語』に画題を取っている。

期待していた大臣の位を手に入れることができなかった徳大寺実定は、清盛の歓心を買うために、はるばる都から平家一族の氏神を祀る厳島神社に参詣する。実定は、7日間にわたる参籠の接待に出た巫女の中で、ひときわ琵琶が上手で上品な顔立ちをした巫女の有子内侍に興味を持ち、

「只尋常ノ情（ただ世の常のなさけ）」として一首の恋歌を詠み与える。まだ年も若く純真な有子は、実定に一途な思いを寄せ、都に帰った実定の後を追って、便船に乗って住吉（今日の大阪市住吉区）の沖までやってくるが、結局思いを伝えることもできず、「はかなしや 波の下にも入りぬべし 月の都の人やみるとて」という歌を詠んで海に身を投げてしまう。

この話は、船中で年老いた遊女が、あるいは激しくあるいは切々と琵琶を奏するさまを歌った白居易の漢詩『琵琶行』のイメージを重ね合わせて作られた物語で、さまざまな『平家物語』諸本の中で『源平盛衰記』という一本にのみに記されている。

芳年の絵では、便船ではなく小舟が描かれ、有子の心細い思いが表現される。海上に照り映える一筋の月の光は「月の都の人（実定）」への一途な有子の思いでもあろう。琵琶は必ずしもリアルに描かれてはいないが、画中に書き込まれた和歌と響き



あって、美しい琵琶の音と有子の歌声が聴こえてくるような一枚である。江古田キャンパスの楽器博物館3階でこの絵の実物を見ることができる。

薦田治子（本学音楽学教授）

日本・ドナウ交流年2009記念事業

『武蔵野音楽大学管弦楽団ハンガリー演奏旅行』報告

音楽を通しての国際交流



▲ リスト音楽院大ホール(ブダペスト)

昨年はドナウ川を共有する4ヵ国(オーストリア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニア)それぞれが、日本との国交関係において記念すべき節目の年であり、「日本・ドナウ交流年2009」と銘打ってさまざまな記念事業が催されました。武蔵野音楽大学は特にハンガリー共和国と交流が深く、「日本・ハンガリー国交回復50周年」と「本学園創立80周年」を記念して、この度リスト音楽院とのオーケストラ交流を実現。その一環として、本学管弦楽団のハンガリー公演が昨年9月に行われ、コンサートを開催した5都市すべてで大きな反響を呼びました。国際交流にも大きく貢献した演奏旅行の模様をレポートします。

八木節に大きな反響

演奏旅行の皮切りとなったブダペストリスト音楽院での演奏会では、開演に先立ちバッタ・リスト音楽院院長、伊藤在ハンガリー日本特命全権大使、福井武蔵野音楽大学学長、バローグ・ハンガリー共和国教育文化省副大臣

から、日本・ハンガリー国交回復50周年を記念する交流事業の意義についてのご挨拶があり、コンサートの雰囲気が一気に盛り上がりました。

プログラムは、まずハンガリーを代表する作曲家リストの「交響詩レ・プレリュード」、同じくコダーイのオペラ「ハーリ・ヤーノシュ」から“ドナウの彼方”と「セーケイ地方の紡ぎ部屋」から“チタール山脈のふもとは”の二重唱曲。続いてリスト「ピアノ協奏曲第2番イ長調」、最後はチャイコフスキーの「交響曲第6番ロ短調(悲愴)」でした。アンコール曲はブラームス「ハンガリー舞曲第5番」、ヨハン・シュトラウス「ポルカ・ハンガリー万歳」、そして外山雄三の「ラプソディ」から“八木節”を演奏しました。

最初の2曲はハンガリーの皆さんには馴染み深く、手拍子が起こった会場もあったほど。アンコールの“八木節”は日本民謡を素材とし、太鼓やちゃんちき等

の和楽器を取り入れたもので、観客の興味もひととき高まり、大きな反響を呼びました。

成し遂げた充実感

今回の公演では、国際交流の意義をより高めるため、指揮者にハンガリーからの客員教授カールマン・ベルケシュ氏を、オペラ二重唱にリスト音楽院で声楽を学ぶクララ・ヴァンチェ(ソプラノ)とダニエル・パタキ=ポチョク(テノール)を起用。さらにピアノ協奏曲のソリストは、最初のリスト音楽院(ブダペスト)とタタバーニャ市のコンサートではリスト音楽院のガボール・ファ



▲ アンコールに代えて「八木節」を演奏

ルカシュ氏、ペーチ市の公演では本学ヴィルトゥオーソ学科4年の竹中千絵、デブレツェン市とジュール市では同じく3年の荒井茉里奈と、日本、ハンガリー双方のピアニストが交互に務めました。いずれの演奏もソリストの個性がオーケストラと見事に協奏し、聴き応え満点でした。

最後のタタバーニャ市では、コンサート終了後に全員が市長主催のレセプションに招かれ、副市長の歓迎のご挨拶、本学からお礼の挨拶、記念品の交換があり、その後は地元の方々と和やかな歓談が続きました。学生たちは重責を果たしたという満足感もあり、ハンガリー語、英語を取り混ぜて積極的に国際交流に努め、素晴らしい思い出となりました。

最終コンサートの翌日は、リスト音楽院のご好意でリスト博物館を見学、続いてブダ側にある“漁夫の砦”にも案内していただき、美しいドナウの流れ

とベストの街を望む風景を満喫することができました。その夜は、バッタ・リスト音楽院院長が、民族音楽アンサンブルのメンバーを伴ってわざわざ宿泊ホテルまでおいでになり、ファイナル・パーティーを催してくださいました。民族音楽の生演奏では、演奏の熱が帯びるにつれ誰彼ともなく踊り出し、その輪はハンガリーのスタッフまで巻き込んで大いに盛り上がりました。

肌で感じたお国柄

今回の演奏旅行は、ブダペストのホテルを拠点に毎日各都市へバスで移動してコンサートを行うという強行軍でした。天候が何より心配されましたが、幸いにもハンガリー滞在中は毎日が晴天で、移動中にはハンガリーの素



ブダペスト
“漁夫の砦”にて



晴らしい風景を存分に楽しむことができました。

楽器運搬については、リスト音楽院の楽器担当者3人が常時同行してくれ、本学楽器担当者との協力のもと、搬入、搬出、セッティングは実にスムーズに行われました。

お国柄を感じたのはプログラムに関して。ポスターやチラシ、シーズンコンサートパンフレット等は立派なものがあるのに、公演当日のプログラムはなく、わずかに1会場のみチケットに曲目が印刷されていた程度の質素なものでした。しかし考えてみれば、音楽の本来の聴き方は、プログラムで曲名や作曲の経緯、演奏家名を知ることではなく、鳴り響く音楽そのものを聴いて楽しむもの。これも当然の習慣なのかなと、ハンガリーに来て初めて学んだことのひとつでした。

そしてもう一つ日本と異なることは、演奏後の拍手です。演奏が終わると、まず日本と同じようにパチパチと拍手が起きます。それが10秒、15秒ほどすると、全員が拍子を合わせたパチ・パチ・パチという、まるで運動会の応援のような拍子に変わります。しかも、このリズムが次第に早くなっていきます。音楽でいうアツチェランドです。誰かが音頭をとっているわけでもないのに、ある程度早くなるとまたテンポを落とし、同じような拍手を何度も繰り返します。私たち日本人には、何とも不思議に思われました。



▲ 荒井茉里奈(大学3年)



▲ 竹中千絵(大学4年)



▲ ケルチエイ・カルチャーセンター(デブレツェン)



* * *

今回の本学演奏旅行のマネジメントは、全てリスト音楽院が担当してくれました。その対応はホスピタリティに富み、日本人と同じ感覚でとても快適でした。早朝から真夜中まで、疲れた様子を一切見せず温かく且つ誠実にお世話してくださり、お陰で私たちオーケストラメンバーは、終始大変素晴らしい演奏旅行をすることができ、生涯の思い出となりました。

この度の本学管弦楽団のハンガリー公演は、「日本・ドナウ交流年2009」を記念した事業としても大変充実したものとなり、無事その任務を果たすことができました。関係した皆さま方に厚く御礼申し上げます。(演奏部長：池田 温)

* * *

武蔵野音楽大学管弦楽団ハンガリー演奏旅行 「日本・ドナウ交流年2009」認定事業

9/20(日) 出発

23(水) リスト音楽院大ホール(ブダペスト)

24(木) ペーチ医科大学ホール(ペーチ)

25(金) ケルチエイ・カルチャーセンター(デブレツェン)

26(土) ヤーノシュ・リヒター・コンサートホール(ジュール)

27(日) ヤーサイ・マリ・シアター(タタバーニャ)

30(水) 帰国

指 揮：カールマン・ベルケシュ

ソプラノ：クララ・ヴィンチュ テノール：ダニエル・パタキ=ホチョク

ピ ア ノ：ガボール・ファルカシュ

竹中千絵(本学4年)、荒井茉莉奈(本学3年)

本学管弦楽団と初来日したリスト音楽院管弦楽団との交換演奏会



▲ 11月18日 東京芸術劇場 大ホール

今回の記念事業では9月の武蔵野音楽大学管弦楽団のハンガリー公演と共に、本学のプロデュースでリスト音楽院管弦楽団が11月に初来日、11月18日の東京芸術劇場を初日に5会場で公演。プログラムはコダーイ：ガランタ舞曲、リスト：ピアノ協奏曲 第1番 変ホ長調、ベートーヴェン：交響曲 第7番 イ長調 Op.92 他。初日のピアノ協奏曲では本学福井直昭教授が共演しました。各会場とも熱演を繰り広げ、満員となった会場から盛大な拍手が起こり素晴らしい演奏会となりました。



▶ 11月20日
練馬文化センター 大ホール

卒業生インタビュー

信じられないほどの幸運

● 浦田有美 (バンベルク交響楽団・オーボエ) ●



浦田有美 Yumi Urata

静岡県出身。東京都立国立高校卒。'03年武蔵野音楽大学卒業。第73回読売新人演奏会、'03年音大卒業生によるヤマハ管楽器新人演奏会、本学新人演奏会に出演。オーボエを脇岡総一、青山聖樹、József Kiss の各氏に、室内楽を甲斐道雄氏に師事。同年渡独、ライプツィヒ音楽大学入学。'06年同大学卒業、同大学大学院入学。オーボエをChristian Wetzel教授、Susanne Wettemann 氏(ゲヴァントハウス管弦楽団)に、イングリッシュホルンをGundel Jannemann-Fischer氏(ゲヴァントハウス管弦楽団)に師事。'07年バンベルク交響楽団エキストラを経て、'08年3月同楽団2番オーボエ奏者として正式入団。



▲ 恩師 青山聖樹先生と

武蔵野を卒業する直前まで、楽器をやめようかと悩んでいた浦田さん。それが5年後にはバンベルク交響楽団へ正式入団。さらに昨年10月には同団とともに日本へ凱旋演奏を果たしました。ご自身は運に恵まれた、とおっしゃる足跡を伺いました。

卒業直前、青山聖樹先生のすすめで、クリスティアン・ヴェッツェル先生の初の日本講習会に参加。ちょうどその時、先生が持つライプツィヒ音楽大学のオーボエクラスに空きがあった。

浦田: ドイツでは1人の教授が受け持てる学生数に制限があります。先生のクラスに空きがあるなど奇跡的なこと。ビックリするようなチャンス。ドイツ語も知らないし外国へ行ったこともない。留学など全く考えていなかったのに、今しかない、今ならチャンスがある、と留学を決めてしまったのです。

ライプツィヒの入学試験も、武蔵野の卒業生による新人演奏会で演奏した曲の他、2曲用意すれば良かった。これも幸運で、あれよあれよという間に合格してしまいました。

普通高校で吹奏楽部に入り、初めてオーボエを吹き、そのまま武蔵野へ。入学当時は全くの初歩だった。未だにその劣等感が続いている、と言う。

浦田: 他の人に比べて基礎が弱いという自覚があったため、青山先生に徹底的に基礎訓練をしていただきました。教えていただいたことを次の授業までにマスターしようと、それは懸命に練習しました。先生も厳しく、生涯

これほど練習することはないと思うほどやりました。

それでも卒業直前まで進路を決められませんでした。ヴェッツェル先生の講習会を受け、先生の勧めで留学を決意したときのことを思うと、若いから決断できたのかな、今ならできないだろうと思います。ライブツィヒのレッスンも通訳してもらいながらでしたし、入学と同時に語学学校へ通ったほどですから。



だめなら帰ってこようと始めた留学生活。2年ほど経った頃、ドイツに残りたい、ドイツで音楽家になりたい、という気持ちが芽生えてきた。

浦田: 暮らしていくのには日本の方が良いかもしれない、でも、ドイツで音楽をすることは素晴らしい、と思えてきたのです。それにその頃、どこかのオーケストラに入団しなければ生活ができない、という苦しい事情もありました。

ドイツでは大学に入って2~3年でオーディションを受ける準備を始めます。私もライプツィヒの大学院に入ると同時に、オーディションを受けるようになりました。'06年頃からです。

オーディションを受けるには、まず応募書類を出します。それを団員が審査して、受けさせようと思う人には招待状を出します。それでやっとオーディションが受けられます。ほとんど実績

のない人が受けるのですから、どなたに師事しているかが重要です。その点でも私は幸運で、オーディションも受けれない人が沢山いるのです。

バンベルク交響楽団のオーディションは3回受けました。受けるチャンスをつかむのも大変なのですが、1回目の時など、受験者のレベルが低い、とオーディションが途中で打ち切られてしまいました。

でもその時の縁でエキストラに呼ばれ、入団へとつながりました。エキストラで出演するときは、緊張のあまり毎日ご飯が食べられない、毎朝腹痛が起きるなど大変でした。

オーディションを受けるとき、自分の健康状態、精神状態が良いかどうか、それもタイミングというか運です。私より上手な人は沢山います。でもベストの状態で受けられなければ、いくら上手でもだめでしょう。

’08年3月、バンベルク交響楽団に2番オーボエ奏者として正式入団した浦田さん。夏は1ヵ月半の休みがあるが、それ以外の週日は毎日練習(リハーサル)、週末はコンサート。毎週のように新しい曲をやるので練習も大変。同オケはドイツを代表するオケで、小さな街の大きなオーケストラ、最もドイツらしい響きを持つ交響楽団とも言われる。

浦田: 昨年のサマーナイトコンサート、指揮はエッシェンバッハ。リハーサルのときから緊張と感激の連続でした。このオケの特徴である柔らかい響きを自分のものにしたいと思っています。

私は2番奏者です。隣で観ていて、1番は本当に大変だと思います。1番が羨ましい、ソロを吹きたい、と思うこともあります。今は世界一の2番吹きになりたい。大好きなオケでベルリンフィルがありますが、2番吹きがすごく上手です。良いオケはみな2番が上手なのではないでしょうか。私はそんな2番に憧れています。

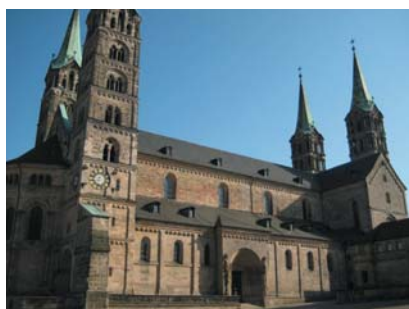


▲ 中列、右から二人目が浦田さん

ドイツに留学してここで演奏家になろうと決心したとき、2つの夢を持ちました。1つはドイツの交響楽団に入ること。2つ目の夢は、その一員として日本公演で演奏すること。2つ目の夢もこの10月に実現しそうです。

留学は私を大きく育ててくれました。しかし、留学しただけで路が開けている訳ではありません。先生や友人との交流、そして運に恵まれること、私は未だに自分の幸運が信じられないほどです。

浦田さんは運があった、と強調される。しかし、どの世界でも、誰にでも運は巡ってくる。その時、その運をつかみ取れるかどうか、チャンスと感じ取れるかどうか。運が巡ってきたときに、人に倍する努力を続けてこそ、その運をつかむことができるのではないだろうか。



バンベルク交響楽団のあるバンベルクの街は、千年の歴史を持つ古都で、ユネスコ文化遺産にも登録されています。街全体が一つの芸術作品で、中世風の教会やバロック風の家々が建ち並んでいます。



この文は’09年6月11日に行われたインタビューをまとめたもので、文責は編集部にあります。

管弦楽団合唱団 & ウィンドアンサンブル演奏会

昨年、武蔵野音楽学園は創立80周年を迎え、これを記念した様々なイベントが年間を通して盛大に行われました。そして年末、この記念すべき年もいよいよクライマックス。恒例の本学管弦楽団合唱団、ウィンドアンサンブルなどの各公演が目白押しに開催されました。

まず、本学2年次生を主体とした管弦楽団、シンフォニック ウィンド オーケストラが、それぞれ公演を行いました。はじめに、管弦楽団が指揮に北原幸男本学教授、ソリストに小林麻里(Vn、4年)、寺澤歌(Cb、4年)を迎え、第1回より出演を重ねる入間市立中央公民館主催の「第30回市民コンサート」に出演(11/14 入間市市民会館)。好

評を博し、地域に根差した文化交流の歴史に新たな1ページを刻みました。続く、シンフォニック ウィンド オーケストラ演奏会では、前田淳准教授の指導のもと培ってきた勉学の成果を、フレッシュな響きにのせて披露しました(11/27 パツハザール)。

さらにヨゼフ・ツィルヒ本学名誉教授指揮による管弦楽団合唱団演奏会では、ハイドン：オラトリオ《天地創造》(独唱：佐藤美枝子本学講師、本大学院修士課程修了 眞塩直、本大学院修士課程2年 大西宇宙)が壮麗に奏され、会場は大きな感動に包まれました(12/5 パツハザール、12/7 サントリーホール)。また、ウィンドアンサンブルには、オーガスタナ大学教授・バンドディ



▲ ウィンドアンサンブル演奏会

レクターとして米国各地で活躍しているジェームズ・ランブレクト本学客員教授が指揮者として初来日。氏の熱意のこもった、きめ細かい指導により磨き上げたテクニックと感性で、新たな武蔵野サウンドを展開。多彩なレパートリーでウィンドアンサンブルの醍醐味を存分に聴かせ(12/17 東京オペラシティコンサートホール)、創立80周年の記念イヤーを豪華に締めくくりました。



▲ 室内合唱団演奏会

創立80周年を迎えた武蔵野の秋の公開講座・演奏会シリーズ。充実した多彩な催しが開催されました。

まず、武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会が9月30日、ベートーヴェンホールにて行われました。今回は本年度より就任した栗山文昭教授の指揮のもと、ルネッサンスから現代作品、邦人作品などを演奏、澄んだハーモニーで聴衆を魅了しました。

続く10月5日には、マリア・カラス国際声楽コンクールやオブラストワ主

宰の若き声楽家のための国際声楽コンクール(ロシア)などで上位入賞を続けている新進のソプラノ、ディナーラ・アリエーヴァのリサイタルが開催され、師であるエレナ・オブラストワ(メゾ・ソプラノ、本学客員教授)をはじめ、郡司忠良(テノール、本学教授)、豊島雄一(バリトン、本学講師)、三ッ石潤司(ピアノ、本学教授)らとオペラの名曲を披露。美しい歌声と舞台を見るような華やかな演技で、楽しませてくれました。

また本学園創立80周年の記念講演として、R. ラリー・トッド教授の講演会が10月19日、22日の2日間、モーツァルトホールで開催されました。教授は



▲ R. ラリー・トッド教授講演会

実り多き秋の公開講座、演奏会

『ニューグローブ世界音楽大事典』の「メンデルスゾーン」の項目の執筆や、交響曲や協奏曲の楽譜校訂も行っているメンデルスゾーンの世界的権威。「メンデルスゾーンの《無言歌》と音楽表現の境界」「2つの協奏曲の成立：メンデルスゾーンのピアノ協奏曲 ホ短調」を演題に、自身のピアノ演奏や本学教員による独唱やアンサンブルなどを交え、大作曲家の隠れた作品の紹介、名曲の成立の裏側など興味深い講演を行いました。つづいて同じく創立80周年記念特別公開講座として、リスト音楽院院長アンドラーシュ・パッター氏による講演会が11月19日モーツァルトホールで行われ、ハンガリーの音楽・音楽教育、リスト音楽院のこと、同国の民族音楽復興の流れなどを講演。どちらも記念講演に相応しい興味深い内容で、講演を聴いた多くの聴衆にとっては大変示唆に富んだ有意義な催しとなりました。

武蔵野音楽学園創立80周年記念 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、創立80周年を記念して、福井直秋記念奨学基金、演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々からご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。 学校法人 武蔵野音楽学園

※ご芳名(五十音順)は、平成21年7月25日から11月7日までの間にご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号に掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何卒ご了承ください。

【同窓生】

荒川静江様 石井敏子様 市川和子様 市原綾子様 伊藤俊彦様 伊藤真理絵様 岩永聖哉様 榎本禮子様 大内美幸様
大河広美様 大川理奈子様 大木道子様 大木玲子様 大澤昭平様 大谷冽子様 大野恵子様 岡田睦子様 岡野哲也様
岡部まりゑ様 小倉道子様 小澤明枝様 尾島陽子様 柯雅雯様 上代万里江様 金田佳代子様 金子朝子様 金子泰三様
金子稔子様 金子正子様 金子陽子様 鴨谷美夏代様 川北冠子様 川口容子様 川野恵美様 川邊章子様 川辺宣子様
木下芙蓉子様 許雅容様 熊坂良雄様 黒住恭子様 高後美智子様 上月光様 小森理恵様 近田淑子様 蔡奎一様
佐伯洋子様 佐久本真智子様 佐藤絢子様 佐藤佳子様 佐藤啓子様 沢登眞佐美様 塩瀬重雄様 島田佐和子様
下田正幸様 辛永秀様 末芳枝様 末次眞砂様 鈴木鉄男様 鈴木晴美様 瀬戸匡弘様 蘇惇熒様 蘇陳信美様
大道寺洋子様 竹内順子様 田中善徳様 田村智子様 張月秋様 陳敦玲様 陳蓉郁様 土谷正公様 所桂子様
鳥垣正子様 中林清治様 中村康子様 萩原菅子様 埴信子様 林美禰子様 福井裕子様 藤川眞佐美様 藤澤洋子様
星野慶子様 本田希代子様 又重正子様 松井春枝様 松浦靖子様 松木瑠美子様 松代信子様 三村明子様
宗片幸子様 藪博之様 山田雅子様 山中正彦様 山本千恵子様 楊冬春様 吉田邦生様 藍敏恵様 李佳倩様
李正堯様 李美芳様 林和恵様 林淑容様 林嘉恵様 林美莉様 盧朝陽様 同窓会熊本県支部様 同窓会静岡県支部
中部地区様 同窓会シンガポール支部様

【在学生・在校生ご父母】

磯田悟様 大瀧正雄様 小田淳一様 川口實様 久保和夫様 桑門秀光様 佐藤昭宏様 鈴木寛様 津田恵次郎様
三井常義様 谷津謙二様 吉川順治様

【役員・教職員・一般・他】

秋本千里様 粟屋泰子様 池田京子様 池田温様 石橋礼子様 磯村桂子様 伊藤暁美様 伊東京子様 岩下恭子様
岩谷晴代様 岩津勢伊子様 上田順様 上村英郷様 宇野慶子様 遠藤麻珠様 大金さつき様 大坪由里様 大呑弘通様
岡野登与子様 岡野壽子様 小川輝之様 小川実佐枝様 小野瀬歩美様 小野田淳子様 加藤弘子様 加藤真弓様
金井和美様 上運天迪子様 川辺真様 岸田譲様 霧生雅江様 熊井千恵美様 黒木章子様 小出義人様 甲賀多重子様
上月みどり様 小門敬子様 児玉裕代様 コッホ中村幸子様 薦田治子様 小柳信道様 今野増雄様 堺康馬様
坂下寛様 坂下裕子様 相良優子様 佐々木素様 澤田圭子様 篠澄子様 清水直美様 末吉孝司様 瀬上正様
関根伊佐子様 高谷典子様 高橋清華様 耕修二様 高柳和子様 田代愼之介様 田中通孝様 為本章子様 鶴田和子様
寺本まり子様 藤恭子様 中河幸様 中田淳子様 仲地博幸様 奈良滯子様 野副直行様 春山和雄様 坂幸也様
平野邦夫様 福井春子様 福島宣江様 福島美津枝様 藤波喜和子様 鮎井朋子様 牧田照美様 増崎靖子様
丸山忠璋様 水野雅子様 皆川洋子様 南明子様 三村隆文様 宮木ゆかり様 宮西麻衣様 宮本良樹様 村岡佐毘子様
村上直行様 村田和美様 持田早苗様 守重信郎様 森田美智子様 森原京子様 柳沼てるこ様 山田あつ子様 弓彰様
吉岡千賀子様 渡辺多恵子様 (株)日動様

(他に匿名を希望される方79名)

活き活きとミューズフェスティバル開催

木々の葉が黄金色に染まり始める10月、11月に開催される武蔵野恒例の“ミューズフェスティバル”。今回も入間・江古田両キャンパスにたくさんの人々が集まり、賑やかに行われました。

大学生、高校生、幼稚園児が一体となって創作する入間ミューズフェスティバルは第34回を迎え、「Tutti〜熱き心をひとつに〜」をテーマに開催され(10月24日、25日)、江古田キャンパスでは、「Viva la Musica!」をテーマに掲げて、第58回Muse Festivalが開催さ

れました。(前日祭10月31日、本祭11月1日〜3日)

学生・生徒によるさまざまなプログラムでの研究演奏が連日披露され、さらには、藤原由紀乃講師(Pf/24日)、田島 勤講師(Tp) & 小池ちとせ准教授(Pf/25日)、岡崎悦子准教授(Pf/1日)、扇谷泰朋講師(Vn/3日)が招待演奏者として出演。音楽愛好家の方々も多数来場、それぞれの分野で日頃の研鑽の成果を発揮しました。

その他、高校生による展示公演、幼



稚園の作品展や音楽教室生徒による演奏発表、各クラブ団体の催しなど多彩な企画が繰り広げられ、来訪者もそれぞれに楽しんでいるようでした。また、学生が運営する模擬店テントには多くの卒業生の姿も見られ、学生たちの熱い思いが詰まった活気溢れる祭典となりました。



栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

（前号までの未掲載分、順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの）

●福井 直敬(本学理事長・学長)

2009年9月にハンガリー共和国より褒章 Pro Cultura Hungarica(プロ・クルトゥーラ・フンガリカ)を授与された

●徳川 愛子(本学名誉教授) 瑞宝中綬章受章

●三ッ石 潤司(本学教授)

2009年12月にオーストリア共和国よりオーストリア共和国功労金章を授与された

●小島 章司(昭和37年大学卒声楽専攻)

平成21年度 文化功労者

●川邊 甲子郎(昭和35年大学卒声楽専攻)

兵庫県より、平成21年度ともしびの賞を授与された

●鈴木 玲子(平成16年大学卒クラリネット専攻)

第2回 ディートリヒ・ティボール・クラリネットコンクール(ハンガリー) 第1位入賞

●浅野 衣美(平成20年大学卒ピアノ専攻)

第19回 国際ピアノコンクール“ローマ2009”(イタリア)ソリストB部門 第2位入賞

第3回 全日本芸術コンクール 関東本選 ピアノ音大・一般部門 第1位入賞

●奥田 恭子(平成14年大学卒ハープ専攻)

第21回 日本ハープコンクール プロフェッショナル部門 第1位入賞

●杉山 由紀(平成20年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学)第63回 全日本学生音楽コンクール 声楽部門 大学・一般の部 全国大会 第1位入賞、東京大会本選 奨励賞受賞 ●金子 淳(平成21年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学)横浜開港150周年記念ピアノフェスティバル&コンクール ヴィルトゥオーソ部門 第1位入賞、特別賞受賞、第6回 北本ピアノコンクール H部門(一般) 第2位入賞 ●佐藤 理絵子(大学2年次在学ハープ専攻 本高等学校卒)第21回 日本ハープコンクール プロフェッショナル部門 第4位入賞 ●三浦 麻葉(本大学院修士課程2年次在学ハープ専攻)第21回 日本ハープコンクール プロフェッショナル部門 第6位入賞 ●波佐間 成美(大学4年次在学声楽専攻)第63回 全日本学生音楽コンクール 声楽部門 大学・一般の部 全国大会 第3位入賞、東京大会本選 第1位入賞 ●栗生田 直樹(平成15年大学卒クラリネット専攻)第20回 日本木管コンクール 本選 クラリネット部門 入選 ●鈴木 遥(大学4年次在学クラリネット専攻)第20回 日本木管コンクール 本選 クラリネット部門 入選 ●石井 智恵(大学3年次在学フルート専攻)市川市文化振興財団 第22回 新人演奏家コンクール 管楽器部門 最優秀賞受賞 ●倉田 瑞樹(大学2年次在学打楽器専攻)びわこミュージックハーベスト「打楽器&マリンバアカデミー」最優秀受講生としてハーベスト賞受賞、受賞記念修了演奏会出演 ●櫻井 香織(大学4年次在学フルート専攻)第12回 “長江杯”国際音楽コンクール 管楽器部門 大学の部 第2位入賞(1位なし)、第10回 ANP ル ブリアン・フランス音楽コンクール 奨励賞受賞 ●久保田 恵理(大学4年次在学ピアノ専攻)第12回 “長江杯”国際音楽コンクール ピアノ部門 大学の部 第2位入賞 ●小島 加奈子(大学4年次在学ピアノ専攻)2009年 アジア国際音楽コンクール 大学生ピアノ部門 第2位入賞 ●秋津 緑(平成20年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学)第21回 愛知県尾東音楽コンクール 声楽部門 大学生・一般の部 銀賞受賞 ●日浦 真矩(平成20年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学)第63回 全日本学生音楽コンクール 声楽部門 大学・一般の部 全国大会 入選、東京大会本選 第3位入賞 ●岩永 圭司(大学3年次在学ピアノ専攻)第15回 みえ音楽コンクール ピアノ部門 大学生以上一般の部 第3位入賞 ●西村 葵(大学2年次在学フルート専攻)市川市文化振興財団 第22回 新人演奏家コンクール 管楽器部門 優秀賞受賞 ●加藤 由貴(大学4年次在学サクソフォン専攻)第3回 横浜国際音楽コンクール 管楽器部門 大学の部 第5位入賞 ●氏本 舞(大学3年次在学ピアノ専攻)第17回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 大学生の部 ピアノ部門 審査員特別賞受賞 ●東郷 美貴(平成17年大学卒ピアノ専攻)第10回 大阪国際音楽コンクール デュオ部門 エスポール賞受賞 ●筒井 香織(平成8年大学卒クラリネット専攻 本大学院修士課程修了)第10回 大阪国際音楽コンクール 管楽器部門 Age-G 入選 ●古野 綾(平成15年大学卒ピアノ専攻)第10回 日本アンサンブルコンクール 重唱部門 優秀演奏者賞・全音楽譜出版社賞受賞 ●小口 奈緒(大学3年次在学ピアノ専攻)独立行政法人 日本学生支援機構 平成21年度優秀学生顕彰事業 文化・芸術分野 奨励賞受賞 ●渡部 瞳(平成13年大学卒サクソフォン専攻)第10回 日本アンサンブルコンクール 室内楽部門 入選 ●佐藤 香(平成21年大学卒マリンバ専攻)／●巻之内 弓美子(平成21年大学卒打楽器専攻)第10回 日本アンサンブルコンクール 室内楽部門 入選 ●伊藤 仁歩(平成19年大学卒クラリネット専攻)／●徳永 美幸(平成19年大学卒ホルン専攻)第10回 日本アンサンブルコンクール 室内楽部門 入選 ●猪口 伸太郎(平成19年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学)第17回 ヤングアーチストピアノコンクール ファイナル ピアノ独奏部門 Fグループ 入賞 ●鈴木 瑛子(大学2年次在学ピアノ専攻)第19回 日本クラシック音楽コンクール 地区本選会 ピアノ部門 大学の部 好演賞受賞 ●嶋崎 雄斗(大学4年次在学マリンバ専攻)MUSICA SANT'ANGELO 第4回 新人演奏会オーディション 優秀新人賞受賞 ●宮森 庸輔(平成20年大学卒音楽学専攻)世界写真フォーラム主催写真展『世界遺産 遥かなり』最優秀賞受賞 ●八十田 志保(本高校2年次在学ピアノ専攻)第19回 日本クラシック音楽コンクール 地区本選会 ピアノ部門 高校の部 優秀賞受賞 ●田中 舞(本高校1年次在学ピアノ専攻)第17回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 高校生の部 ピアノ部門 審査員特別賞受賞 ●黒澤 春奈(附属江古田音楽教室在室 都立文京高等学校3年生)第12回 全国「叱られて」歌唱コンクール 中高生の部 準優秀賞受賞 ●江黒 颯乃(附属江古田音楽教室在室 練馬区立大泉学園中学校2年生)第17回 ヤングアーチストピアノコンクール ファイナル ピアノ独奏部門 Dグループ 優秀奨励賞受賞 ●上西 富美子(附属入間音楽教室在室 狹山市立富士見小学校1年生)第17回 ヤングアーチストピアノコンクール ファイナル ピアノ独奏部門 Aグループ 優秀奨励賞受賞 ●久保 琴梨(附属江古田音楽教室在室 西武学園文理小学校3年生)第33回 ビティナ・ピアノコンペティション 東日本Ⅲ地区本選 ソロ部門 B級 本選優秀賞受賞 ●熊澤 由唯(附属入間音楽教室在室 東星学園小学校3年生)／●山口 由貴(附属入間音楽教室在室 入間市立黒須小学校3年生)第33回 ビティナ・ピアノコンペティション 東日本デュオⅠ地区本選 デュオ部門 連弾初級A 本選奨励賞受賞 ●大島 弓人(附属江古田音楽教室在室 越谷市立千間台小学校4年生)第3回 全日本芸術コンクール 関東本選 ヴァイオリン小学生3・4年部門 優秀賞受賞、第33回 ビティナ・ピアノコンペティション 東日本埼玉Ⅱ地区本選 ソロ部門 B級 入選 ●桑原 歩美(附属江古田音楽教室在室 お茶の水女子大学附属幼稚園在園)第33回 ビティナ・ピアノコンペティション 東日本千葉Ⅰ地区本選 ソロ部門 A2級 本選優秀賞、東日本Ⅰ地区本選 ソロ部門 A2級 本選奨励賞受賞 ●鎌田 大翔(武蔵野音楽大学第一幼稚園在園)第6回 北本ピアノコンクール A部門 優秀賞受賞、入賞者コンサート出演予定、第3回 ベーテンピアノコンクール 東京地区本選 自由曲コース 未就学児部門 優秀賞受賞

平成22年度学生・生徒募集のお知らせ

武蔵野音楽大学大学院音楽研究科

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
博士後期課程 入試	平成22年2月10日～ 20日消印まで	郵送のみ	平成22年 3月9日～11日

●博士前期課程の出願は締め切りました。

武蔵野音楽大学（音楽学部）

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
1年次 一般入試A日程	平成22年1月15日～ 30日消印まで	平成22年 1月29日・30日	平成22年 2月18日～23日
1年次 一般入試B日程	平成22年3月5日～ 13日到着まで	平成22年3月13日	平成22年 3月16日～18日
3年次 編・転入試験	平成22年1月22日～ 28日消印まで	郵送のみ	平成22年 2月12日～14日

- 一般入試A日程の受験では、国語・外国語（英または独）について、大学入試センター試験を利用できます。
- 一般入試B日程の受験は、国語・外国語（英または独）について、大学入試センター試験の受験者に限ります。

武蔵野音楽大学附属高等学校（音楽科）

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
附属高等学校 推薦入試	平成22年1月14日～ 18日必着	郵送のみ	平成22年1月22日 入間キャンパスにて実施
附属高等学校 一般入試	平成22年1月21日～ 29日必着	郵送のみ	平成22年 2月12日・13日

- 入学試験の詳細については、各入学試験要項でご確認ください。
- 上記、入学試験は、江古田キャンパスで実施します（ただし附属高校推薦入試のみ、入間キャンパスで実施）。
- 各入学試験要項は、郵便および江古田キャンパスで取り扱っています。要項は無料ですが、郵送をご希望の場合は、氏名、住所、電話番号、および附属高校、大学1年次、大学3年次、大学院の別を明記し、切手（高校240円、大学1年次390円、大学3年次240円、大学院390円）を同封の上、武蔵野音楽学園広報企画室 〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1 TEL 03-3992-1125 までお申し込みください。また、学園のホームページ、携帯サイトからも請求ができます。http://www.musashino-music.ac.jp/ 携帯サイト http://musaon.jp/

音楽教室（江古田・入間・多摩）入学試験スケジュール

受験資格（学年は平成22年3月末現在）

導入・初級・中級・上級コース 江古田・入間・多摩音楽教室	導入 …………… 3才 初級 …………… 4才から小学校1年生まで 中級 …………… 小学校2年生から 小学校6年生まで 上級 …………… 中学校1年生から 高等学校2年生まで
受験コース 江古田・入間・多摩音楽教室	武蔵野音楽大学附属高等学校受験 …………… 中学校1年生以上 武蔵野音楽大学受験 …………… 高等学校1年生以上
エクセレンス・コース （将来音楽家をめざす、児童、 生徒のための高度なコース）	5才から高等学校2年生まで （江古田音楽教室のみに設置しています）

【入学試験】平成22年3月7日（日）（各教室にて）
●ただし、エクセレンス・コースの入学試験は江古田音楽教室で行います。

【願書受付】平成22年2月12日（金）～2月27日（土）

【試験科目】実技・ソルフェージュ・面接。未就学児（3才～5才）は面接のみ。
音楽をはじめ勉強される方は、音楽教室にご相談ください。エクセレンス・コースの
未就学児は、実技・ソルフェージュの試験を受けてください。

【要項請求】ご希望の音楽教室へお申し込みください（要項・送料とも無料）。

※その他詳細については、下記へお問い合わせください。

江古田音楽教室 TEL.03-3994-7536 入間音楽教室 TEL.04-2932-1111
多摩音楽教室 TEL.042-389-0711

●表紙の顔



エレナ・オブラスツォワ教授

ロシアの世界的に著名なメゾ・ソプラノ歌手。レニングラード音楽院で学ぶ。ヘルシンキ世界青年祭コンクールで金メダル、全ソヴィエト・グリンカ声楽コンクールでグランプリ、チャイコフスキー国際コンクール第1位、フランス・コ・ビニヤスココンクールで第1位受賞など、多数の有名コンクールで受賞しています。1963年にボリショイ歌劇場でデビューし、その後ウィーン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座など世界各地の主要歌劇場に出演し名実ともに世界を代表するオペラ歌手として君臨しています。

一方、数多くのオペラ全集および歌曲の収録を行う他、多数の著名なコンクールの審査員を務め、さらには「若き声楽家のための国際声楽コンクール」を主宰して後進の育成をライフワークとするなど、精力的な音楽活動を行っています。

武蔵野音楽大学へは、1993年からほぼ毎年来日し、客員教授として、また本学のインターナショナルサマースクールの講師として指導に当たり、これまでに多くの優秀な声楽家を世に送りだしています。

現在、オブラスツォワ国際声楽コンクール総裁、ムソルグスキー記念サンクトペテルブルク国立ミハイロフスキー歌劇場顧問、武蔵野音楽大学客員教授。

編集後記

新春の巻頭を飾ってくださった雑喉先生の文章を拝読し、半世紀にもわたるその新聞記者人生が、まるで天の配剤のように中国文学にまつわる不思議な縁で結ばれていることに驚きます。ひるがえって我々皆が携わっている「音楽」を通して、どんな出来事があるのか、どんな出会いがあるのか、年頭に際して想いを馳せるのもまた楽しいところです。昨年創立80周年を迎えた武蔵野音楽学園は、90周年、100周年に向け、今日からまた一步一步着実な歩みをつづけてまいります（編）。

箏 銘 福寿

重元房吉作 日本 全長177cm

江戸後期——天下泰平・鎖国の時代において、日本の工芸界は飛躍的に独自の発達をとげた。漆芸・金工・木工・蒔絵などの各分野で、匠の技が成熟を極め、その繊細な細工は、現在でも賞讃されるものである。楽器の世界も例外ではなく、六尺ほどもある箏の両端や側面などに、別材をはり、金蒔絵や螺鈿・木工細工などの豪華な装飾が施された。このように装飾に重きをおいた箏を「飾り箏」といい、生田流を中心に用いられた。一方、素地のままや、素地に直接象嵌を施す箏を「素箏」といい、主に山田流で好まれた。写真の楽器は、山田流の素箏であるが、素地に直接南天文螺鈿・珊瑚象嵌が施され、当時の流行が反映されている。

山田流は、生田流の誕生から約100年後の1800年頃に誕生した、比較的新しい流派である。当時の生田流

は、三味線主導で、地歌三弦の曲に箏を加えたものだったのに対して、山田流は、江戸の河東節や謡曲の要素を取り入れ、歌中心、箏主導の新しい形式の曲を作ったといわれている。

また、山田流創始者である山田検校は、箏師であった弟・重元房吉とともに、楽器を改良し、演奏姿勢なども変化させていった。具体的には、音量を増大させるために、柱を高くし、糸を強めにはり、全長はやや短く、箏のそりを大きくした。また、演奏姿勢を楽器に対して斜め向きから正面に変化させたが、これはより歌声を前に響かせるためであると考えられている。楽器本来の音響的な改良に力を注いだことが窺え、現在では流派を超えて、この新たなタイプの箏が使用されている。

この楽器の作者は、初代重元房吉の流れを汲むもので、何代目の作であるかは不明であるが、槽内部には、房吉の焼印を見ることが出来る。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)



目次

明けましておめでとうございます 福井直敬	1
豊饒の海の新聞記者 雑喉 潤	2
音楽余話 ペダルは 風景を照らす月の光である コンスタンティン・ガネフ	4
音楽の万華鏡 月百姿の音楽場面 薦田治子	5
『武蔵野音楽大学管弦楽団ハンガリー演奏旅行』報告 音楽を通しての国際交流	6
卒業生インタビュー 信じられないほどの幸運 浦田有美	9
MUSASHINO NEWS 管弦楽団合唱団&ウィンドアンサンブル演奏会 実り多き秋の公開講座、演奏会 武蔵野音楽学園創立80周年記念 ご寄附をいただいた方々 生き活きとミューズフェスティバル開催 栄冠おめでとう！(コンクール入賞者等) 平成22年度 学生・生徒募集のお知らせ 平成22年度 音楽教室入学試験スケジュール	11

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

発行

学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111 (代表)

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2010年1月10日発行 通巻第92号



携帯サイト
<http://musaon.jp/>